

ハインリヒ・マン『アンリ四世』における「戦うフ マニスト」についての一考察

長光, 卓

<https://doi.org/10.15017/4482106>

出版情報 : 九州ドイツ文学. 34, pp.17-37, 2020-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン :
権利関係 :

ハイน์リヒ・マン『アンリ四世』における 「戦うフマニスト」についての一考察

長 光 卓

はじめに 『アンリ四世』は反ナチス抵抗小説か

ハイน์リヒ・マンの長編小説『アンリ四世の青春』¹⁾(1935年)及び『アンリ四世の完成』²⁾(1938年)(以下、それぞれ『青春』『完成』とし、併せて『アンリ四世』と略記する)は題名が示す通り実在のフランス王アンリ四世を題材にした長編小説である。アンリ四世は、16世紀フランスにおいて四十年近く続いた宗教戦争をナントの勅令によって収束させ、内乱によって荒廃した国家を再建してブルボン王朝の基礎を築いた。この作品はその大筋がこの王の伝記に沿ったものであるにも拘わらず、従来の研究では反ナチス抵抗小説として解釈されることが多い。

作品の執筆開始直後にナチス政権が樹立し、亡命を余儀なくされたマンは作品の大部分を亡命先のニースで書いた。このような作品背景に加えて、作品中にもナチスの影が見え隠れしている。

彼らが通りかかると、民衆は口々に一つの言葉を伝えた。それは「パリの王様、万歳(Heil)！」と言っていた。人々は右手を高くさしあげてこの「王」に敬礼した。

(中略) 屈辱的な講和や異教徒によって押し付けられた協約などはかくて引き裂かれるだろう。土と血も声高に力、力、力と叫び、これらに縁のないすべてのもの、腐りきった礼節や国家を解体させるような自由を一掃せよと求めているのだ。(HJ, S. 415)

アンリのライバルであるギース公が通りかかる際に民衆がする右手を高くさしあげての敬礼や、演説のなかの「土と血」³⁾という言葉から、ギースがヒトラーの、ギース率いる旧教同盟がナチスの戯画になっていることがわかる。『アンリ四世』はこの旧教同盟やそれを裏から操るハプスブルクの支配に対し、理性と人間性を奉じる主人公アンリが立ち向かってゆくという構図になっている。これらのことから、この作品は発表当時から反ナチス抵抗小説として解釈されてきた。⁴⁾

しかし、物語を反ナチス闘争の比喩と捉えるこの解釈は『アンリ四世』という作品全体に当てはめることはできない。なぜなら『青春』における対立関係と『完成』におけるそれが異なっているからである。『青春』では旧教同盟によるカトリックの支配に、迫害を受けるユグノーたちの首領であるアンリが立ち向かうという明確な対立関係が描かれており、これをナチスによる支配とそれに対する抵抗の比喩とみなすことができる。しかし『完成』

では旧教同盟やハプスブルクだけではなく、アンリの旧臣チュレンヌのように、かつて信仰の自由を求めて苦楽を共にしたユグノーがアンリに敵対することがあり、その一方でカトリックのピロン元帥のように、かつてアンリを苦しめた敵が最も信頼する戦友となることもある。さらにはアンリ自身が改宗によってカトリックになる。『完成』ではもはや新旧両派の対立といったような明確な対立関係ではなく、宗派や派閥の別では分けられない複雑で入り組んだ対立関係になっている。

加えて、マンの回顧録『一時代は考察される』⁵⁾ (1946年) (以下、『一時代』と略記する) によると、『アンリ四世』の着想は彼がアンリの居城だったポー城を訪れた1925年のことであり (ZA, S. 490)、その当時ナチスはまだ社会的脅威とはなっていなかった。確かに、七年にわたる構想と題材研究のあいだにナチスが脅威となり、そのことが彼に筆を執らせたくもかもしれない。だが少なくとも、マンははじめから反ナチス抵抗小説を意図して『アンリ四世』という小説を構想したわけではない。したがって、『アンリ四世』は反ナチス抵抗小説に留まらない作品ではないかと考えられる。では、『アンリ四世』は何を問題として扱っているのだろうか。

作中におけるアンリの描写に注目すると、アンリが「戦うフマニスト」Der streitbare Humanistとして描かれていることがわかる。『アンリ四世』においてアンリは『エセー』の賢人モンテーニュに学び、偉大な王へと成長してゆく。この教えのほとんどが『エセー』からの引用なのであるが、「戦うフマニスト」というフマニストの在り方だけは『エセー』からの引用ではない。すなわち、この「戦うフマニスト」という考えはマンの創作である。したがって、「戦うフマニスト」としてのアンリの描写から、マンが『アンリ四世』に描こうとしたものが見えてくるはずである。

よって、本稿は以下のような構成をとる。第1章では、『アンリ四世』において複数のタイプのフマニストが登場していることを指摘し、他のフマニストの在り方と比較しつつ「戦うフマニスト」を素描する。第2章では、「戦うフマニスト」の理念的前史が他作品における知識人像にあることを指摘し、「行動する精神」の造形がマンのライフワークであったことを示す。第3章および第4章ではそれぞれ民衆との関係、女性との関係という視点から「戦うフマニスト」の考察を行う。最後に、結部（おわりに）にて「愛すること」が「戦うフマニスト」としてのアンリを形成する核となっていることを示し、『アンリ四世』が宗教戦争やナチス支配のようなひとつの「時代」に留まらない、普遍的な問題を扱った作品であることを明らかにする。

1. フマニストの在り方

『アンリ四世』においてモンテーニュはアンリの内面的深化に大きな役割を担っている。作中、モンテーニュはバルトロメウスの虐殺によって囚われの身となって復讐欲に駆られているアンリに対し「何を私が知っていようか」Was weiß ich? (Que sais-je?) という言葉で懐疑の精神を、さらにはキケロの言葉を引用して善意の力を教える。モンテーニュの教育

はその後も行われ続け、アンリはそれを規範に行動し、偉大な王へと成長してゆく。節度や懐疑の精神、善意の力など、アンリがモンテーニュから学ぶことのほとんどは『エセー』からの引用であるが、そのうち一つだけ『エセー』からの引用ではないものがある。それは「戦うフマニスト」というフマニストの在り方についてである。

この二つ（節度と懐疑）は彼ら（フマニスト）にふさわしいものであったが、もし彼らフマニストたちが考えることだけを学んで、馬に跨り、打ってかかることを学ばなければ、これらは全くの有害なものであっただろう。しかしそうはならなかった。モンテーニュでさえも兵士だったのだ。手が不器用だったにも関わらず、彼はこの放っておくわけにはいかない仕事をやったのだ。そうでなければこの仕事を能無しだけに委ねなければならぬが故に、放っておけなかったのだ。このことは知っておかねばならぬ。考える者が行動すべきなのだ。考える者だけがだ。その反対に、理性の埒を踏み越えれば恐るべき不道徳が生まれる。それは無知な者たちのやることだ。彼らは常軌を逸した愚昧によって暴力的になる。彼らを誘惑し、彼らに機会を与えるのは暴力だ。王国の現状を見るがよい！王国は荒れ果て、血と嘘の泥濘と化している。もし我々フマニストたちが馬に跨り、打ってかかることをしなければ、そのような土壌にはいかなる実直剛健な種族も生い育つことはできまい。我々はそのことを忘れまい。諸君、安心したまえ。我々は馬に跨り打ってかかるのだ！（HQJ, S. 593f.）

ここで「戦うという仕事を無知なものに委ねては暴力になる。考える者であるフマニストこそ戦わなければならない」というアンリの意思表示によって「戦うフマニスト」という独特なフマニストの在り方が示される。一般に16世紀フランスのユマニストは、古典語及び古典文学の研究を通じてより人間的な学芸を探求しようとした学者と解される。⁶⁾ パリの知事ブリサクやパリ高等法院院長のブリッソンはこの「古典を紐解く」（HQV, S. 278）タイプのフマニストとして描かれている。しかし、アンリと旧臣のアグリッパやデュ・パルタスはそのような学者的な側面が描かれていないにも拘わらずフマニストという名が冠され、かつ兵士として描かれることで「戦うフマニスト」として描かれている。『アンリ四世』には大きく二つの異なるタイプのフマニストが存在しているのである。

ブリサクやブリッソンはいわば「戦わないフマニスト」なのだが、彼らは『アンリ四世』において批判的に描かれている。アンリは、かつて先王アンリ三世を裏切って旧教同盟につき、今度は旧教同盟を裏切ってアンリにつこうとするブリサクはどのような人物なのか、ブリサクの婿でアンリの家臣であるサン・リュクに尋ねる。

「〔前略〕ブリサクはすぐに私の側につくことができただろうし、正しい方を選ぶだけの知恵もあつただろう。今になってスペインを裏切って私につくことになるのなら、なぜあの時彼らにつかざるを得なかったのだろうか。」

（中略）

「彼は裏切り者の役を演じようとしているわけではありません。練習を積み、技を鍛えることによって裏切り者になりきっているのです。」

「それで自分もフマニストだと称しているのか。」アグリッパ・ドービニェはそう言って椅子から急に立ち上がった。

「我々はフマニストというものを大真面目に考えていたのだ。私は馬を駆けさせ、敵陣に飛び込みながら詩を作ったものだ。私は戦うフマニストたる我が主君の戦のために、哀れな虫けらのように裸足になって堡壘を築いているときでも、敬虔な顔をしていたものだ。」

アンリは虚空に向かって言った。「それ(戦うフマニスト)はフマニストの在り方の一つだ(Das ist die eine Art)。しかし、もう一つあるとすれば(Bliebe die andere)、それはより複雑なのだろう。それは人間を不安定にし、人から顔つきというものを奪い取ってしまうものなのだが」サン・リュクの方を向いて彼は少し笑い声をあげた。「それも良いではないか。ブリサク伯の絵画を集め、古典を紐解くというやり方も。そのおかげで知恵を絞って首都を私に引き渡そうとしてくれるのだからな」(ebd., S. 277f.)

「フマニストこそ戦わねばならない」という信念を持つアンリにとって「正しい方を選ぶだけの知恵もあった」にも拘わらず、自らの利害のために誤った側につく「顔つき」のないブリサクは、戦うという「仕事」を「無知な者」に委ねてしまう「有害なもの」でしかない。それゆえ、アンリはフマニストの在り方について語るとき、「戦うフマニスト」には sein を用いるが、ブリサクのような「フマニスト」には bleiben の接続法 II 式を用いる。アンリは「戦うフマニスト」こそ真にフマニストであると確信する一方、ブリサクのようなフマニストの在り方に対しては極めて懐疑的な見方をしているのである。アンリはブリサクを「病める理性」(ebd., S. 281)と表現する。ブリサクのような「戦わないフマニスト」は「病める」ものとして断罪されている。アンリに味方するブリッソンも事情は同じである。理性的な法学者であるブリッソンは旧教同盟の支配に危機感を覚え、狂気に陥ったパリを救うべくヌムール公と会談するが、法を信奉するあまり旧教同盟と戦うという決断まではできない。その結果、彼は法を信奉するというその理性ゆえに現実を直視することが出来なくなり、破滅する。ブリッソンもブリサクと同じく「病める理性」なのだ。

『アンリ四世』において「戦わないフマニスト」は「病める理性」として批判的に描かれていた。では、一方の「戦うフマニスト」とはどのような存在か、何のために戦うのか。アンリの協力者であったエリザベス女王の訃報に接し、アンリは次のように語る。

二人(アンリとエリザベス)は、真の信仰告白として、等しくフマニズムを信奉していたのだ。それは、人間の現世における使命、すなわち人間が理性的で勇敢であること、自由に生き、満ち足り、幸福であることに対する信仰だ。

『彼女はたくさん殺したな。彼女は血を望んでいたわけではないのだけれども。私はビロン(二世)を処刑したわけだが、私とて血を望んでいたわけではないのだ。敵の

暴力が人間の使命を妨げようとするときは、フマニストは戦闘的でなければならぬ。好戦的な我がユグノーも正義と良心を守った。私もこれと同じことをいつもやってきたのだ。ピロンが裏切り者だった限りはだが。エリザベスも私も強くあらねば、王の責務を極限まで押し上げなければならなかった。——だがそれは人間を矮小ならしめるためではない。人間は王の尊厳において、自らの現世の偉大さをこの目にし、しかとこれを認識すべきなのだ。』(ebd., S. 733)

ここで「フマニズムス」とは「人間が理性的で勇敢であること、自由に生き、満ち足り、幸福である」という「人間の現世における使命」を信じることでであるとアンリは定義する。「真の信仰告白として」と表現されているように、生涯に六度もの改宗を行ったアンリにとって、プロテスタントでもカトリックでもなく、この「フマニズムス」こそが彼にとっての「信仰」であった。アンリはこの「フマニズムス」を信仰する人間という意味でフマニストである。

では「戦うフマニスト」が戦っている「敵」とは何者なのか。マンはアンリが対峙している敵の正体を次のように描く。

アンリは知っている。ルーヴルを後にした彼は地獄を知っている。彼はモンテーニュから善意が民衆的なものだと学んでいる。モルネーが彼に美德がいかなる力を持つか教える。彼の本性はそれ自身の奈落にのぞみながらも、明るく節度を保ったままである。だが、彼は知っている。人間という種族がこれを望まないということ。彼が生涯の終わりまで、いたるところでぶつからざるを得ないのはまさにこの種族であることを。それはプロテスタントでもなければ、カトリックでもなく、スペイン人でもフランス人でもない。それは人間という種族なのだ。この人間という種族が暗い力を、下界の重みを求め、恐怖と不純な恍惚において放蕩を好むのだ。それが彼の永遠の敵であるだろう。だが彼はあくまでも理性と人間の幸福の使者なのである。(HQJ, S. 589)

アンリが「戦うフマニスト」として対峙している敵は旧教同盟やハプスブルクといった特定の宗派や派閥ではない。権勢欲に駆られて反乱や暗殺計画を企てるブイヨン公やピロン二世、王妃マリのように、アンリが対峙しているのは「暗い力を、下界の重みを求め、恐怖と不純な恍惚において放蕩を好む」「人間という種族」である。従って、旧教同盟やハプスブルクも、反乱や暗殺を企てるユグノーたちも、すべて人間の暗い本性が衣装と名前を変えて現れたものでしかない。この人間の暗い本性というアンリの「敵」は普遍的に存在する「永遠の敵」である。それゆえ、ナチスの戯画となっている旧教同盟との戦いに勝利してもアンリの戦いは続いてゆく。旧教同盟との決戦に勝利した場面でマンはアンリに次のように語りかける。

アンリよ。我々は決して「ここで終わり」などではない。むしろ我々は不死であら

ねばならない。それほどまでに果てしなく、我々は我々の持ち分を巡って戦わなければならない。我々の持ち分とは人間である。(HQP, S. 92)

「戦うフマニスト」は16世紀的なフマニストとは全く異なる、人間の為に人間の暗い本性と戦うという使命を帯びた存在である。「戦うフマニスト」とは人間という存在を巡って戦う人間の幸福な生への奉仕者というべき存在であった。

2. 知識人から戦うフマニストへ

この「戦うフマニスト」はマンのエッセイ『ゾラ』⁷⁾(1915年)に由来する。というのもマンは『ゾラ』において知識人ゾラをアンリと同じく人間の幸福な生のために戦った人物として描いているからである。マンはこのエッセイでフランスの自然主義作家ゾラの一生を、とりわけドレフュス事件におけるゾラの「精神」と「行為」(それぞれ『ゾラ』の章題になっている)を描き出し、それによって第一次世界大戦におけるドイツの戦争とそれを支持する「知識人」を批判し、同時に彼が理想とする知識人の姿を示した。

早くからフランスの文物に学び、平和とデモクラシーの立場に立っていたマンにとって、ドイツ帝国という「権力者の、金儲け人の、享樂家の国家」(WB, S. 1344)が「権力のためにのみ」(ebd., S. 1348)起こす外に向けて戦争は「上っ面だけの者たちが事を成す機会でしか、卑しい情熱や欲望の口実でしか」(ebd., S. 1357)なく、批判されるべきもなかった。

しかし、当時のドイツの知識人のなかには、西欧の「文明」に対して、ドイツの「魂」と「文化」を擁護しようという立場から、第一次大戦におけるドイツの戦争に賛成する「知識人」たちもいた。弟トーマスもその一人であり、マンに宛てた手紙の中でこの戦争を「偉大な、この上なく立派な、いや荘厳な民族戦争」と称賛している。⁸⁾

ドイツの戦争を批判するマンにとって、この戦争に賛成する彼ら「知識人」もまた批判の対象であった。彼はドイツの戦争を賛美する「知識人」たちを、彼らは「きらびやかに輝いて人目に立つ」(ebd., S. 1370)という彼ら自身の虚栄心のために「にせの愛国心」(ebd., S. 1366)を語って狂気と犯罪に手を貸している「寄生者」(ebd., S. 1371)にすぎないと言って切り捨てる。マンにとって、彼らはもはや知識人と呼ぶことのできない存在だった。それゆえ、彼は『ゾラ』で知識人という存在を次のように定義する。

かくも大きく様々な出来事をふまえ、精神をその身で体得し、久しい労働の中で精神のために立ち上がろうという意志を獲得した人は、ゾラを継ぎ、ゾラを評価した人々によって知識人と呼ばれた。知識人とはそういう人間にほかならない。知識人とは精神の愛好家でも手職人でもない。ある種の職を持っているが故に知識人になるわけではない。まして、精神の現象形式に物欲しげに手を触れることで知識人になることなどない。——精神とは真逆の空虚な反動的イデオロギーに思想上の拠り所を提供する

あの深刻ぶった口先だけの連中などもってのほかだ。彼らは認識の持ち主だと思い込んでいる。だがあらゆる認識の彼岸にあって彼らは卑劣な暴力の賛美者であるかもしれないのだ。(ebd., S. 1356)

ここでマンはあるべき知識人の姿と批判されるべき「知識人」の姿の双方を「精神」という言葉を用いて表現している。この「精神」の実像は『ゾラ』におけるイプセン・ニーチェとゾラの対比によって明らかになる。マンはいずれも真理を探究した「精神的人間」としているが、その評価は対照的である。マンはイプセンやニーチェの人間を嫌悪する精神的貴族主義⁹⁾を「彼らの精神でしかなかった」(ebd., S. 1356)と批判する一方で、人間が「いつの日か幸福に至りつくこと」(ebd., S. 1379)を信じるゾラを「精神そのものである」(ebd., S. 1356)と称揚している。マンにとって人間を信頼する「精神」こそが「彼らの」と限定されない「純粋な精神」(ebd., S. 1371)であった。

加えて、マンは『ゾラ』において「精神は即ち人間のためになされる行為である Geist ist Tat, die für den Menschen geschieht (中略) 精神の人は行動せよ der Geistige handle!」(ebd., S. 1359)と要請する。マンにとって「精神」は「行動」を伴っていなければならない。従って、マンにとって知識人のあるべき姿とは、ゾラのように「万人の幸福を」(ebd., S. 1381)求めて戦った「行動する精神」handelnder Geist (ebd., S. 1358)であった。それゆえ、マンにとって「精神」のために敢えて戦おうとはしない「知識人」は「精神の愛好家」や「手職人」でしか、人間を抑圧する権力に手を貸す「知識人」は「卑劣な暴力の賛美者」でしかない。

『ゾラ』における知識人と『アンリ四世』におけるフマニストはほとんど一致していると言ってよい。『ゾラ』においてマンが理想として考えた知識人と『アンリ四世』における「戦うフマニスト」は、ペンによってか剣によってかという違いはあれども、ともに人間の幸福な生という目的のために戦う「行動する精神」である。一方、『ゾラ』において批判されている「知識人」と『アンリ四世』における「病める理性」の「フマニスト」であるブリサクも共通点を持っている。双方ともに「正しい方を選ぶだけの知恵があった」にも拘らず、人間を抑圧する権力に服従してそれに手を貸す。加えて、マンが前者の在り方こそ真に知識人あるいはフマニストと呼べる存在であると考え、後者の在り方に疑義を呈していることも共通している。

『アンリ四世』における「戦うフマニスト」は『ゾラ』における知識人にその理念的起源を持っていた。しかし、知識人から「戦うフマニスト」への変遷の過程には転回点ともいえるべき作品が存在する。長編小説『頭領』¹⁰⁾(1918年)である。

マンの長編小説『頭領』は、『臣下』*Der Untertan* (1915年)、『貧民』*Die Armen* (1917年)に続くヴィルヘルム帝政下のドイツ社会を風刺的に描いた『帝国』三部作 *Das Kaiserreich-Trilogie* の最後を飾る作品である。この作品において主人公のテラやその親友マンゴルフは知識人として描かれる。とりわけ主人公のテラは、帝国宰相のラナスから「権利の擁護者」(K, S. 316)と、マンゴルフから「人類の為に崇高な未来を信じている」(ebd.,

S. 233) 知識人と評され、ラナスと皇帝に対する死刑廃止の訴えを「私の精神の戦い」(ebd., S. 391) と表現し、ドレフス事件に倣って「人間性という理念の実現」(ebd., S. 321) を目指す、まさに「精神」の側に立つ知識人として描かれる。

しかしテラは予想に反して帝国の体制を前に一撃も加えることができずに破滅へと追いやられる。テラは帝国の「民主主義という名の産業の絶対主義」(ebd., S. 445) を打倒するために宰相ラナスに「上からの革命」(ebd., S. 521) を提案する。しかしその言葉からわかるように、彼の視座にはそもそも民衆の姿はなく、あるのは「精神的に非凡」(ebd., S. 646) だというエリート意識だけである。民衆とのつながりがなければ、「民主主義という名の産業の絶対主義」に対しに立ち向かおうとも、孤立無援のままに打ち破られるは必然である。テラはラナスが語るように「事実からではなく、理念からのみ出発する類の」(ebd., S. 221) 現実的には無力な人間である。

彼の弱さは内面的な部分にも現れている。テラはラナスの娘アリスを愛し続けるが、政治的理想を追い求める彼はアリスへの愛を貫くことができず、アリスの夫となった次期帝国宰相のトルレーベンのテラによる暗殺によって二人の関係は破局する。マンは短編『ピッポ・スパーノ』の主人公マリオや『臣下』の主人公ディーデリヒのように、弱い人間を描くときには愛する能力の欠如という性質を強調してきたが、テラにも彼らと同じ性質が描かれている。

テラは「精神」の知識人ではあるがゾラとは異なり、孤独で無力な知識人としてむしろ否定的に描かれている。これにはマン自身の知識人としての経験と反省が反映されている。作中でテラがラナスに鉱山の国有化を要請したのと同様に、『頭領』執筆中の1923年、マン自身もシュトレゼマンに公開書簡を宛てて炭鉱と鉱山の国有化を要請し、「精神の戦い」を試みたが、受け入れられることはなかった。帝国の体制を風刺する意図があったとはいえ、それまで理想として抱いていた知識人像を孤独で弱い人間として批判的に描いたのはこのような背景によるものだと考えられる。

マンの「行動する精神」の造形は『頭領』において暗礁に乗り上げた。しかし、この経験は『アンリ四世』に引き継がれることとなる。テラという「行動」でできなかった無力な知識人は『アンリ四世』において「フマニスト」ブリッソンという形で描かれる。一方「戦うフマニスト」であるアンリは、彼らとは対照的に人間を抑圧する体制に立ち向かって勝利を収め、理想を実現させてゆく。マンはかつて座礁した「行動する精神」の造形をその経験を活かしながらもう一度『アンリ四世』において試みているのである。

3. 戦うフマニストと民衆

マンが『ゾラ』で示した「行動する精神」の造形は『頭領』において座礁したが、「戦うフマニスト」として『アンリ四世』に引き継がれている。したがって、「戦うフマニスト」であるアンリは知識人テラの抱えていた問題を克服した存在であるはずだ。テラは民衆と連帯することのできない無力な知識人として描かれていた。では、戦うフマニストと民衆

の関係性は『アンリ四世』においてどのように描かれているだろうか。

フランス王アンリ四世は「良王アンリ」と呼ばれ在位中から民衆のあいだで愛された王として有名であり、むろん『アンリ四世』においても、アンリは「生来、金持ちよりも貧しい者たちに親しい」(HQJ, S. 501) 王として描かれている。マンは民衆に親しいアンリ像を描く際、アンリ四世に関係する当時の史料や、ヴォルテールの叙事詩『アンリアーデ』からフランス革命までの二百年近い時をかけて醸成されていったアンリ四世の伝説を参照している。¹¹⁾しかし、マンは史料の記述やアンリ四世伝説を下敷きにしてはいるものの、それらに即して民衆に親しかったがゆえに民衆に愛される王になることができたというようには描いていない。マンはむしろ、民衆的な王になろうとして四苦八苦するアンリの姿を描いている。

アンリにとって民衆的 *volkstümlich* という言葉がアンリにとって重要な意味を持つことになるのはモンテーニュの教えによってである。バルトロメウスの虐殺をカトリックに改宗することで難を逃れたアンリはカトリックの軍に従軍中、『エッセー』の賢人モンテーニュと出会い、彼から次のような教えを受ける。

そうして彼らは立ち上がり、助け合いながら瓦礫の上に這い出た。外に出てからも腕を取り合っていた。ワインの酔いは次第に抜けていった。再び嵐と怒涛のなかでアンリは言った。「だが私は虜囚の身だ。」

「暴力は強い」と彼の連れ(モンテーニュ)は説いた。「しかしもっと強いのは善意だ。善意ほど民心ヲ収攬シウルモノハナイ。」

この言葉をアンリは二度と忘れることはなかった。彼はこの言葉を彼の心を慰める唯一のものとして聞いたからだ。善は民衆的なものだ。善ほど民衆的なものはない。(HQJ, S. 380f.)

ここでモンテーニュが教える「善意ほど民心ヲ収攬シウルモノハナイ」という言葉はケクロの演説「リガリウスの弁護」の文句であり、『エッセー』にも引用されている言葉である。¹²⁾しかしアンリはこの「善意ほど民心ヲ収攬シウルモノハナイ」*Nihil est tam populare quam bonitas*を「善ほど民衆的なものはない」*nichts ist so volkstümlich wie Gutsein*という言葉に言い換える。一見、ラテン語の文章をそのままドイツ語の文章に翻訳しただけのように思われるこの言い換えだが、ここからアンリがモンテーニュの言葉に彼一流の解釈を加えて再解釈していることが見て取ることができる。

バルトロメウスの虐殺において、これまで「人間は礼儀や皮肉や気軽な好意によって悪業から引き留められるものだなどと思って行動してきた」(ebd., S. 325) アンリは、民衆が「整然と仕事を楽しむかのように」(ebd., S. 313) 野蛮な振舞をしている様子を見て「彼ら(民衆)を恥ずべき悪業へと引っ張り込むのはなんと易しいことだろう。が彼らによって善 *etwas Gutes* をなすのは容易ではない」(ebd., S. 320f.) と衝撃を受ける。さらには、バルトロメウスの虐殺という「恥ずべき悪業」を引き起こした張本人のギースが、この事件によっ

て民衆に歓呼される英雄になりおおせている現実を目の当たりにする。アンリは「恥ずべき悪業」が民衆的なものになりうること、「善」の持つ力がいかに取るに足らないものであることをまざまざと思い知らされ、「善」というものに絶望する。

そうした絶望のなかにあるアンリにモンテーニュは「善意ホド民心ヲ取攬シウルモノハナイ」という言葉を教える。暴力によって名声を得ることはできるだろう。しかし、暴力よりも善意の方が民心を取攬することができる。善意によって民衆を味方につけた力は、暴力によるそれよりも強い。善意は暴力よりも強い。モンテーニュの教えはアンリにとってまさに「彼の心を慰める」ものだった。それゆえ、悪が「民衆的」になりうることを知るアンリは、bonitas というラテン語を「善意」Güteではなく「善」Gutsein という言葉で言い換え、「善意」という言葉を「善」にまで敷衍して解釈する。

アンリが自身の経験と認識と照らし合わせて独自に解釈をすることで「二度と忘れること」のない血肉と化したこの教えは、ルーヴル脱出後のアンリの行動を決定する規範となる。ルーヴルを脱出したアンリは、彼に対して都門を閉ざす街々と民衆を暴力によってではなく、善意と寛容によって服させてゆく。アンリがフランス王となつてなお都門を開こうとしないパリに対しても、アンリは暴力ではなく善意と寛容によってパリを手に入れようとする。

アンリ王の都内進入は簡単にはゆくまい。四千の敵兵を片付けるのはわけないことだろう——だが民衆の善意はそういうわけにはいかない。彼らはよき王を待ち望んでいる。王は彼らに都門の外から貯えを持ち帰って食べてよいと許していたというのに、どうしてこの期に及んで彼らの家に砲撃を加え、殺戮しながら首都を打ち負かすことができようか。そんなことは許されない。彼は民衆からの人気にふさわしい行動をし、最も民衆に愛されている男として権力を握らねばならない。アンリはここで数週間を費やして、人々が彼の愛想よさについて持っている観念を意識して高めることに努めた。善意ホド民心ヲ取攬シウルモノハナイ。(Hqv, S. 268)

アンリはこの数週間後、ブリサクの助けを得てパリへと無血入城を果たす。彼は暴力によって権力を手に入れるのではなく、善意によって権力を握るのである。しかし、首都を手に入れてもなおアンリは「民衆の心を征服し続けなければ」(ebd., S. 246)ならなかった。王国と民衆の生活が豊かになってほしいという願いのもと、アンリはさまざまな改革を行うが、それらは民衆の反感を買うことになる。

不決断と不信。ロニーの外交遠征で得た金を別とすれば、アンリがこれまでに得た収穫といえばこの二つだけだった。ルーヴルに店を設けたのも同じ結果に終わった。一番下の階に店舗を作らせたが、そこでは手職人と芸術家が商売の上下なく軒を並べていた。アンリの願いは王国の商売が上昇に向かっていくことを、全ての国民にも外国人にも誰にも見やすいところから見てもらいたいというのだった。

(中略) それに、首都の人間は改革に対して不信の念を抱いた。(中略) 商売道具が音を立て、客の応対があるかと思えば、仕事着を着た店の者が出入りする。それがみな国王と同じひとつ屋根の下でのことなのだ。許されることだろうか。冒険にはならないだろうか。王が建築なさる。それはかまわない。王は手始めに、庭師のルノートルに命じて大花壇を設計させ、丈高に刈り込んだ生垣でたくさんの通路を作らせたが、それは結構なことだ。財政顧問のロニーが民衆から搾り上げた金をふんだんに使って、笠松、オレンジ、エジプトいちじくといった外国の樹木を植えている。ほかのものは一切締め出して、広間という広間を緑一色に飾っている。それも国王らしいことだ。我慢ならないのは、王が下々の店にお寄りになって、そこでの仕事にかかわりあいになることだ。(ebd., S. 353f.)

アンリがいかに民衆に親しく気さくにふるまい民衆のために働こうとも、民衆は彼を愛そうとしない。民衆は「地上の王からも天帝の尊厳と同じ、厳粛さ、不可測、確然たる距離を求める」(ebd., S. 377) のであり、「簡素な装いのなかにおのずから威厳を示そうとしても、そんなものは民衆にわかりもせず、認めもしない」(ebd., S. 377) のである。民衆のための改革が民衆の不信を招く結果に終わり、そればかりか民衆が刺客としてアンリの命を狙ったことに打ちひしがれたアンリは、民衆を「恩知らずな民衆」(ebd., S. 375) と罵る。しかし、数日を過ごすうちに立ち直ったアンリはこの経験によって「民衆の愛」について認識を深めることになる。

人生の終わりに、いや恐らく終わりが来て初めて民衆の愛を勝ち得ることになるだろう。まだその時ではない。殺され、そして愛される——まだその時は来ない。(ebd., S. 377)

アンリは民衆の愛を現世で勝ち得ることはないであろうと諦観の念を持つようになる。それでもアンリは民衆が「国王らしさ」をアンリに求めていることを理解してやり、民衆の望むように「偉大な王」を民衆のために演じて見せる。

ありとあらゆる豪華が繰り広げられた。アンリ王ただひとり皮の衣に黒鉄の鎧をまとい、イヴリーの戦いのときのように兜に白い羽をつけていた。世の人はアンリのそういう姿を知っていて、今もそういう姿で現れるのを望んだのだ。彼は世の人たちの意思に従い、大王について世の人が抱いている形を守ろうとした。彼はそういう偉大な王を演じてみせたのだ。(ebd., S. 514)

自らの偉大さとは誤解でしかない (ebd., S. 517) という認識を持ちながらも、民衆が望む王をアンリは演じる。しかし、アンリが「偉大な」王を演じるのは民衆への軽蔑の気持ちからではない。アンリは心穏やかに民衆に対して次のように語る。

私はこれから彼らの中に入ってゆく。どれだけいい服を着るようになったか、どれだけ食事が良くなったか見てみよう。私を認めてくれようと認めてくれまいとかまわまい。私を気のいい仲間だと思って受け入れてくれさえすればよい。それ以上のことは求めまい。(ebd., S. 530)

アンリはむしろ善意と寛容をもって民衆的な王たらんと「偉大な」王を民衆のために演じるのである。アンリはこののちも民衆の望む王を演じ続け、許される限りで民衆に親しく気さくに振る舞い、民衆的な王たらんと民衆と王国を第一に考えた政治を行う。しかしながら、やはり民衆は国王に万歳を叫ぶこともあれば、刺客としてアンリの命を狙いもする。数度の暗殺未遂があったあと、最後には狂信的なカトリック教徒のラヴァイヤックによってアンリは暗殺されることになる。しかし、『アンリ四世』の物語はアンリの暗殺によって終わるわけではない。『完成』の最終節においてアンリ暗殺後のいわば後日譚が語られる。この後日譚は次のように締めくくられる。

一度は自分たちの王を持ったということを彼ら(民衆)は決して忘れはしないだろう。王の心臓は彼らのためだけに脈打ったのではない。王自身の優勢を誇ろうとしたために、フランスの偉大のために、そして世界の平和のために王の心臓は高鳴った。だが、王にとって第一のものはやはり民衆だった。彼らが貧しかったとき、王の心臓は彼らの最も近くにあったのだ。

今日に至るまで貧しいものたちとともにある唯一の王。

セール・ロア・ド・キル・ポーヴル・エー・ガルデ・ラ・メモワール。(ebd., S. 936)

『アンリ四世』の物語はアンリを歌ったフランス語の詩¹³⁾をもって締めくくられる。アンリがかつて予感していたように、彼は「終わりが来て初めて」民衆に歌われ、愛される存在になったのである。このように民衆的なものをめぐるアンリと民衆の関係という視点からこの物語を見てゆくと、『アンリ四世の完成』という題名は示唆に富んだものになる。アンリは暗殺されることによって民衆的な王として「完成」したのである。

『アンリ四世』において民衆はアンリが善政を敷けば愛してくれるような単純な存在ではない。民衆は善政に感動し、「いつまでも王への忠節を守ることを心に決め、力をこめてそのことを誓った」(HJQ, S. 566) かと思えば、その一方で彼の統治を「アンチクリストの到来」(HQV, S. 536) と考え、刺客としてアンリの命を狙う。民衆は「歌を歌い、ひざまずくと同時に人を刺し殺しもする」(ebd., S. 253) ののである。それゆえ、アンリと民衆の関係は杯を交わすこともあれば敵対することもある複雑な関係になる。マンはアンリを決して英雄譚的な人物としてではなく、むしろ民衆的な王になろうとして、時には成功して喜び時には失敗して苦悶する、表情豊かな人物として描いている。このことはアンリの仇敵であるスペイン王フェリペ二世や彼の臣下たちとの対比のなかでより明確になる。

彼は勝ちはあるが、心は冷たいままだ。喜ぶことがないのだ。(中略) その肉体が衰え、喜びを忘れていたこともふくめて、人は彼の精神に畏怖する。世界帝国に従属する国語を異にする諸国民はこの人物において自己を認識する。(ebd., S. 85)

畏怖によって諸国民を支配するフェリペやその臣下たちは喜びという感情を持たない非人間的な人物として描かれる。「諸国民を使ってガレー船を漕がせ」(ebd., S. 201)、「手足を動かすことなく机に座ったまま世界帝国を支配」(ebd., S. 198)するフェリペと民衆の関係は神と人間のそれと似て「不可侵」(ebd., S. 85)な関係である。一方、アンリは自身を民衆と同じ存在だと考える。

私は偉大の時を持った。しかし偉大であるとは何であろうか。己と同じ人々に仕える(dienen)謙遜さを持ち、それでいて彼らに先駆ける(vorausseilen)ことだ。私は王であり、そして民衆の一人でもあった。(ebd., S. 938)

マンはここで「仕える」という表現を用いているが、それによって王が民衆に「仕える」という逆転した関係が生じている。この民衆への奉仕をアンリは「悦ばしき奉仕」fröhlicher Dienst(この言葉は『完成』第四章の章題にもなっている)と表現する。

悦ばしき奉仕の二十年。それは私が小国ナヴァールの王であった時から始まった。戦いがあり、労働があり、数々の勝利を収め、権力を握った。そして決死の跳躍があり、労働はいつまでも続いた。(ebd., S. 375)

この「悦ばしき奉仕」という表現はニーチェの『悦ばしき知識』*Die fröhliche Wissenschaft*(1882年)を意識していると思われる。¹⁴⁾ニーチェは『悦ばしき知識』においてニーチェは「種族が一切である」と認識し、自分自身を笑い飛ばすことができたとき、陰鬱な「学問」は「笑い」と結びつく「悦ばしき知識」になると語る。¹⁵⁾マンもこれと同じように、「悦ばしき奉仕」の一つである「権力を握ること」と「笑い」を結び付けて表現する。アンリはバリ入城前夜、プロテスタントの牧師ダムールに次のように語る。

「あなたの髪もひげも白くなった。私のだつてごらんのとおりで。あなたの顔は厳しいだけではない。悲嘆の思いがあふれている。さて、私の顔も見ていただこう。愉快な顔をしているだろうか。それでも私は打ち明けて言うが、権力を握ることは時としておもしろいものだ。」彼は繰り返して言った。「おもしろい」——それからすぐに言葉をつづけた。「人間はこのようにして権力が握られるに値する。権力はこのように握られなければならないのだ。」(ebd., S. 272)

ユグノーのダムールにとって権力を握ることはカトリックに打ち勝つことであり、そのよ

うな権力闘争はダムールを「厳しく」「悲嘆にあふれる」顔つきにさせる。それに対し、アンリにとって「権力を握ること」はどちらかの宗教の自由のためではなく人間の幸福のための奉仕であり、それは冗談のような楽しいものになる。学問は「真理」を求めて苦しむ理性の仕事ではなく、むしろ笑いと結びつく楽しいものであるべきことをニーチェが「悦ばしき知識」という言葉で暗示しているように、戦いや労働、権力闘争や不本意な改宗（決死の跳躍）など、本来は苦渋を伴う行為であっても、人間という種全体の幸福のための奉仕であるときそれは「悦ばしき」ものになることをマンはここで「悦ばしき奉仕」という言葉によって示唆している。

アンリと同じくフェリペも、自身がいままで行ってきた行為を「奉仕」(ebd., S. 198)と表現し、「奉仕——それが私の一生であった」(ebd., S. 198)と語る。しかし、アンリの奉仕とフェリペのそれが決定的に違うのは、アンリが自身と同じ人間である民衆への奉仕であるのに対して、フェリペの奉仕は教会への奉仕であり、神への奉仕である点である。人間を軽蔑し、「天のみ使いの仲間になる」(ebd., S. 199)ことを望むフェリペは「頑固で、冷酷無常な親しみを持たない」(ebd., S. 193)表情で「私は囚人だ」(ebd., S. 201)と語る。人間を嫌悪し、人間の幸福ためではなしに己の浄福のために神に奉仕するフェリペにとって、奉仕は「悦ばしき」ものではなくむしろ苦渋に満ちたものである。

フェリペが人間を忌み嫌い、神への奉仕によって神と一体になって人間を超克することを望んでいたのと同じように、ニーチェも人間という存在から距離を取ろうとする。『悦ばしき知識』における思索をもとに発展していったニーチェの超人思想にあるのは、醜悪な「畜群」としての人間であり、忌み嫌う人間から離れたたいという「距離のパトス」である。それに対して、アンリの「悦ばしき奉仕」にあるのは自分と同じ人間である民衆であり、彼らに対する同胞愛である。アンリの「悦ばしき奉仕」はニーチェ自身の思想とは全く逆である。¹⁶⁾

この同胞愛は民衆に「先駆ける」ことにおいても重要になってくる。「先駆ける」voraus-eilen ということは「先頭に」voraus 立つことにほかならないが、そもそも「群」が存在しない限り「先頭」も存在し得ない。言い換えれば、「群」の中においてこそ「先駆ける」ことができるのである。それゆえ、「畜群」たる人間から距離を取る超人は民衆に「先駆ける」指導者たることは出来ない。「群」から距離を取ろうとする点では「頭領」のテラも同じである。テラは超人のように嫌悪感こそ持っていないが、「精神的に非凡」であるという自負によって民衆から無自覚的に距離を取る。テラはこの精神的距離ゆえに民衆に「先駆ける」ことができなかった。一方、アンリにはテラのような民衆に対する精神的距離はない。「王でありながら、民衆の一人でもあった」と語るアンリは王という「先頭」に立つべき立場にあり、同時に「民衆の一人でもある」という同胞愛を持っていたからこそ、民衆に「先駆ける」ことができたのである。

ニーチェは人間を超克した高みへと向かう推進力を称揚するが、マンは反対に愛を以て民衆のなかへと下りてゆき、人間の幸福な生のために戦ったアンリを「偉大である」と表現する。アンリはこの同胞愛ゆえに「戦うフマニスト」として人間の幸福な生のために戦

うことが出来たのである。

4. 戦うフマニストと女性

民衆への愛とアンリの偉大さは『アンリ四世』において不可分に結びつくものとして描かれている。では、今一つ『頭領』のテラに欠落しているものとして描かれていた要素、すなわち女性への愛は『アンリ四世』においてどのように描かれているのだろうか。

アンリ四世はその生涯に五十人以上の女性と関係を持った多情な王だったと伝えられている。『アンリ四世』においても数々の女性との恋愛が描かれており、寵姫ガブリエル・デストレとの八年間が王の後半生二十年を描いた『完成』のうち六割近い紙面が割かれていることからわかるように、作中描かれる恋愛の描写はアンリの戦いと理想実現という本筋をしのぐほど多彩なものである。

『アンリ四世』において登場する女性たちのなかでも、最初の王妃マルゴと最愛の女性ガブリエルはアンリの人生においてとりわけ重要な位置を占めている。彼女たちの描写はアンリが愛したほかの女性たちの描写と比べて圧倒的と言ってよいほど多く、マルゴは『青春』におけるヒロイン、ガブリエルは『完成』におけるヒロインとすることができる。

アンリとマルゴの関係は「その愛の対象を苦しみもがくまで強く抱擁する」(ebd., S. 330) ような愛憎に満ちた関係である。二人は時には耳も目も効かなくなるほどの官能に溺れて愛し合い、時には互いに相手を亡き者にしようとするほど憎しみあう。マルゴがアンリの愛したほかの女性たちと決定的に違うのはこの点である。憎しみのあまりマルゴを亡き者として扱うアンリの姿を見て、グラモン伯爵夫人(コリザンド)は次のように語る。

彼はマルゴを憎しむがあまり彼女を亡き者として言ったのだ。彼女は彼を捨て、アジャンの街で守りを固め、アンリを没落させんとして働いていたのだ。彼の方でも彼女の没落を願っていた。彼に向き合っている女性(グラモン伯爵夫人)は愕然とした。自分の目の前に一つの存在が立ち現れたのだ。この人に比べて私はなにものだろうか。他人にすぎない。私の身に残るのは何であろうか。彼の手紙、それは言葉だけのものだ。彼は自分自身に語っているにすぎない。ミュージズに語り掛けるのは孤独な人間だけだ。(ebd., S. 618)

「持ち金を使って彼(アンリ)のために連隊を作り、彼が戦って勝利を得たときは、雪のように白い両腕を広げて彼を迎える」(ebd., S. 606) グラモン伯爵夫人はアンリの王座への道を支える「ミュージズ」ではあるのだが、「ミュージズの相貌が輝きを失い、それどころか赤いしみができてしまう」(ebd., S. 606) と「ほかのすべての女性たちと同様、幻滅し心に苦澁をかみしめることになる」(ebd., S. 606) 運命に彼女はあつ。それに対し、アンリはマルゴを「バルトロメウスの夜のマルゴ」(HQV, S. 52) と呼ぶ。『アンリ四世』においてアンリはマルゴとの官能的な愛に溺れ、妹やアグリッパなどの警告を聞き流してしまった結果、

バルトロメウスの虐殺という悲劇に遭う。マルゴはアンリにとって、彼の運命の始まりであるバルトロメウスの夜を象徴する女性である。それゆえ、マルゴの場合は他の女性たちと「万事が違っている」(HJ, S. 606)。王座への道を支える「ミューズ」グラモン伯爵夫人との愛とは異なり、「ヴェーヌス夫人」と表現されるマルゴとの愛はバルトロメウスの夜という破滅につながる。この意味でマルゴはファム・ファタルな一面を持つ女性である。

しかし、一方ではバルトロメウスの夜という事件はアンリに飛躍の契機を与える。アンリは復讐のために人間を観察し、人間について認識を深めてゆくが、この認識はモンテニューとの出会いによって偉大な王へと成長してゆくための下地となる。バルトロメウスの夜なしにアンリは人間に対する深い認識を得るに至らなかった。この意味ではマルゴは王として飛躍するきっかけを作った女神だとも言える。マルゴとの愛によってアンリは破滅も飛躍もする。まさに「アンリの青春を魔力 Zaubер と呪い Fluch によって底の底まで形作った」(ebd., S. 606) 女性なのである。

アンリの人生においてとりわけ重要な位置を占めるもう一人の女性ガブリエルとアンリの関係は、とりわけ彼女の死によって象徴的に描かれる。アンリはガブリエルを亡くしたとき、妹のカトリーヌに手紙を送って「私の心の根（『完成』第六章最終節の題名）は死に絶えてしまった。二度と芽吹くことはない」(ebd., S. 661) と語る。これは史実に基づく描写であるが、実際のアンリはこの手紙で「私の心の根」ではなく、「私の愛の根」と表現をしている。¹⁷⁾ すなわち、マンは『アンリ四世』において実際のものとは違う表現をアンリにさせているのである。この表現はマン独自の表現ではなく、19世紀フランスの歴史家ジュール・ミシュレの表現である。¹⁸⁾ ミシュレのこの書き換えに関し、『フランス史』におけるガブリエルの叙述を研究した論文「ガブリエルの死」において坂本さやかは、ミシュレの書き間違えによって、ほかの歴史家たちの場合とは異なり彼の記述においては、ガブリエルの死はあらゆる感情の源である「心」の根の死をももたらしたものとして、より深刻な意味を帯びたものになっている¹⁹⁾ ことを指摘している。マンは『アンリ四世』執筆の際、その構想に六年の歳月をかけ、その期間にアンリ四世に関する膨大な量の史料と著作を研究している。²⁰⁾ しかし、それにもかかわらずマンは「愛の根」ではなく「心の根」という表現をしている。したがってマンのこの表現は意図的なものである。すなわち、マンはあえてミシュレの表現を採用することによって、アンリとガブリエルの愛に唯一無二の特別な意味を持たせているのである。マンは『アンリ四世』においてアンリとガブリエルの関係を次のように描く。

彼女（ガブリエル）が彼によって何度も生まれ変わったように、彼もまた王として、また人間として何度も生まれ変わった。彼女に愛されるために、心にもないことを言い、身を恥じる。宗教を捨て、王国を手に入れる。勝者となり、弱者を守り、ヨーロッパの希望となる——つまり、偉大になる。そして早くも飽和の状態がやってくる。それらは全て定まったことで、ひとつまたひとつと現れるべき定めにある。ついに偉大な王の愛人は最後の命運を彼に加える。すなわち彼女が死んで、王に残されたのは夢

想に生き未来を予見することだけとなる。無理もない。人々は王とそのやり方にはもううんざりだと思ふ。彼らは王に背を向ける。王は一人ますます高きに登り、ついに姿を消す。だが彼がマダム・ド・リアンクール（ガブリエル）を陣中のなかに呼び寄せ、二人して至福の境にあった時、彼は何一つ知らなかった。（HQV, S. 145f.）

マンはアンリのガブリエルへの愛と偉大な王への飛躍を結び付けて描いている。実際、「王の不屈な戦いぶりをこの目で見て、ガブリエルの心の堡壘は一つ崩れた」（*ibd.*, S. 120）という表現にみられるように、ガブリエルはしばしばアンリの政治的な目標と同一視される。アンリはガブリエルの愛を勝ち得ようと街々を落とし、ガブリエルと結婚するために「決死の跳躍」をやつてのける。ガブリエルに愛されたいという気持ちが彼を活動させるのである。

しかしながら一方で、アンリはガブリエルによって破滅へと向かうことにもなる。ガブリエルの死によって「心の根」を失ったアンリは、キリスト教国家の連合を目指した「大なる計画」という名の「未来」を「夢想」するようになり、その計画の実現へと動いたその時、この計画を教皇への謀反だと考えたラヴァイヤックによって暗殺される。ガブリエルを愛するがあまり、ガブリエルの死がアンリ自身の死のきっかけにもなってしまうのである。「ヘレナ」（*ibd.*, S. 126）と呼ばれるガブリエルもマルゴと同じくアンリの破滅のきっかけとなるファム・ファタルとしての一面を持った女性であり、一方ではアンリの偉大な王への飛躍を支える女神としての一面も持つ二面的な女性なのである。

ガブリエルとマルゴが代表しているように、『アンリ四世』においてアンリの愛する女性たちの多くはこの二面性をもつものとして描かれる。ルーヴルの女官マダム・ソーヴとの情事にはまり込んだアンリは、ルーヴル脱出の決意を鈍らせてしまうが、権謀術数うずまくルーヴルにおいて彼女はアンリにとっての安らぎの場となる。アンリエット・ダントラグは「心の根」の死に絶えたアンリの慰めとなるが、結婚の約束を破ったアンリを恨み、王妃マリとともにアンリ暗殺計画に参加する。シャルロット・ド・モンモランシーはその美貌によってアンリを若返らせ、「大なる計画」のための活力を湧き立たせるが、アンリを裏切って夫のコンデ王子とともに王座を狙う。アンリは女性への愛ゆえに失態を犯し、陰謀に巻き込まれもするが、その一方でアンリは女性への愛ゆえに戦いに勝利し、偉大な王にもなる。アンリの多情さは彼にとっての弱点なのだが、同時にこの多情さはアンリの最大の長所でもあるのだ。マンは、女性への愛によって力を奮い立たせることによって、偉業をなしとげることができたのだという独特な解釈を加えてアンリと女性たちの関係を次のように描く。

彼の前には、すっかりヴェールを外して、年老いて病にかかったらしい貧しそうな女性が立っている——だが彼女はかつて彼の性を恍惚とさせ、彼の力を奮い立たせたのだ。もしこういう女性たちが彼を恍惚とさせ、力を奮い立たせなかったら、彼はここまで来ることができなかつただろう。首都が門を開いて彼を迎えるまでには至らな

かっただろう。(ebd., S. 165f.)

確かにアンリは理性によって「この国土（フランス）と民衆を向上させ幸福にする」(ebd., S. 716) ことを自らの使命とし、その実現に向けて行動するのだが、「彼がなすすべてにとって、彼を根源から突き動かすもの」(ebd., S. 51) は「性とその恍惚によってあふれ出す高揚する力」(ebd., S. 451) であった。アンリがいかに善意と理性を持っていたとしても、「もし愛がなかったら、彼は身動きも」(ebd., S. 466) できずに「絞め殺され」(ebd., S. 466) ていたのである。愛こそが「彼（アンリ）という人間を支える真実の力」(ebd., S. 51) だった。

このこともやはりアンリとフェリペとの対比によってより明確になっている。『アンリ四世』においてフェリペはアンリの宿敵としてその名は何度も登場するのだが、実際にフェリペ自身が登場するのは、この長大なこの作品のなかでたった一度だけ、それも「敗残者」*Der Besiegte* と題された一節のみである。フェリペは聴罪司祭に対して次のように語る。

「私は世界帝国をこの机に座ったまま支配した。手足を動かすことなく。そんなことは軽蔑すべき笑止の沙汰だ。私の精神が全てだったのだ。それに世界は服従の意を示した。私の意思が命令するままに世界がまるで粘土のように姿を変えた。(中略)

私の精神と意思がすべてを成し遂げたのだ——それゆえに私は世界帝国を、人間の肉に溺れることなく、そして肉を一切掴むことなく支配することができたのだ。(ebd., S. 198f.)

精神と意思こそが全てだと語る彼にとって自らの手足すらも「軽蔑すべき」ものなのである。人間を「浅はかな欲望にうごめく人間ども」(ebd., S. 196) と憎悪し、自らを「天使のように無垢だ」(ebd., S. 198) と語る彼は、聴罪司祭に人間の肉体とそれを愛するアンリへの軽蔑を語るうちに、宮廷の前を通りかかった娼婦に対し不意に欲望を燃やしてしまい、その娼婦とのたった一度の接触で梅毒に感染し、死んでしまう。多くの女性を愛しながら女性への愛によって力を奮い立たせ、世界帝国に勝利を収め、理想を実現する「勝利者」*Der Sieger* (『完成』第五章の章題) アンリとたった一度の女性との接触で死に至る「敗残者」フェリペとの対照は明白である。

「精神」の側に立つ人間であるテラもフェリペと事情は変わらない。帝国の指導者層に食い込み権力を手に入れるが、女性を愛することができず、また女性によって励まされることない彼の「戦い」は次第にその陰鬱さを増してゆき、最終的に帝国の体制を前に敗北を喫する。テラもフェリペと同じく女性を愛することのできない「敗残者」だった。しかし彼らとは反対に、アンリはたとえそれが悲劇や陰謀につながるとしても女性を愛さざるを得ない。むしろ、彼は女性を愛することによってその活力をいやましに増大させ、それによって理想を実現させる。アンリは女性への愛ゆえに「戦うフマニスト」として人間の幸福な生のために戦うことができたのである。

おわりに 「愛なくばなる鐘や響く鏡鉞の如し」

マンは『完成』の最終幕でアンリにフランス語で次のように語らせる。

世界は愛によってのみ救われる。懦弱な時代には暴力が確かなことに思われるだろう。そういう時代には愛することがとりわけ困難であっても、それゆえにこそ真の強者だけが諸君らに愛の手を差し伸べることができるのだ。(HQP, S. 939)

翻って言えば、「愛すること」ができない者はいくら力を持っていようとも真に強い者とは言えず、世界を救うこともできないのである。史実のフェリペ二世は「太陽の沈まない国」と称されたスペイン帝国の最盛期を築き上げた王であり、アンリ四世に劣らず偉大な王である。フェリペは「この世に安息を」(ebd., S. 196) もたらし、「王国を、そしてその揺るがぬ平和をキリスト教世界全体に押し広める」(ebd., S. 196) ことを「わたしの任務」(ebd., S. 196) だと考える。『アンリ四世』において「人民を抑圧する者」(ebd., S. 938) として描かれるフェリペは、世界に安寧をもたらそうという点ではアンリと同じなのである。しかし、マンの興味はその業績ではなく「愛すること」ができるか否かにある。マンは「愛すること」のできないフェリペを「病人」(ebd., S. 80) や「足萎え」(ebd., S. 198) と表現し、愛するという人間的な能力の欠如を身体的欠陥と結びつけて描いている。マンにとって愛する能力の欠如とは不具なのである。

フェリペと同様にテラも同じように「愛すること」ができなかったために「真の強者」となれず、真に人間の幸福な生のために行動することができなかったのである。それゆえ、『頭領』を書き終えた1925年、アンリ四世という題材と出会った際のことをマンは『一代』で次のように回顧する。

何という奇跡のような感奮だろうか。ありありと眼前に思い浮かべることができる。人間的な豊かさが——きまって不具で知のないあの本性ではなく——力を得ることもできるのだ。力ある者は愛することもできるのだ。この王（アンリ四世）が人を愛したように。(ZA, S. 490)

彼がこのように語ったのは、知識人という「行動する精神」の造形が『頭領』で座礁したのちに、アンリ四世という大いに愛しながら人間の幸福な生のために戦った人物を見出すことができたからだろう。マンはエッセイ『形象と教訓』において、民衆への愛と女性への愛は「同じ根を持っている」*die selbe Wurzel* と語る。²¹⁾ 「愛すること」は「戦うフマニスト」としてのアンリを形成する核となるものなのである。「愛なくば鳴る鐘や響く鏡鉞の如し」という聖書の一節²²⁾ が作品のライトモチーフになっている。愛がなければ「精神」は「行為」へと結びつかず、「行為」は「精神」のない無為なものでしかない。「愛すること」によってこそ「精神」と「行為」の弁証法的統合が可能になるのである。「戦うフマニスト」

とは「行動する精神」の造形というマンのライフワークの集大成であった。

『アンリ四世』はその作品史からしても、作品の扱っている問題からしても、反ナチス闘争という一時代のアレゴリーに留まるものではない。『アンリ四世』という作品はハインリヒ・マンの進歩主義的思想の文学的結実である。

注

- 1) Heinrich Mann: *Die Jugend des Königs Henri Quatre*. Studienausgabe in Einzelbänden. Hg. von Peter-Paul Schneider. Frankfurt am Main, Fischer Taschenbuch Verlag, 1991. 以下、引用の際に HQJ と略記する。
また、訳出の際に以下の邦訳を参照した。ハインリヒ・マン『アンリ四世の青春』、小栗浩訳、晶文社、1989年。
- 2) Heinrich Mann: *Die Vollendung des Königs Henri Quatre*. Studienausgabe in Einzelbänden. Hg. von Peter-Paul Schneider. Frankfurt am Main, Fischer Taschenbuch Verlag, 1991. 以下引用の際に HQV と略記する。
また、訳出の際に以下の邦訳を参照した。ハインリヒ・マン『アンリ四世の完成』、小栗浩訳、晶文社、1989年。
- 3) 「土と血」はナチスが用いた民族主義的イデオロギーの一つである「血と土」を想起させる表現。「血」は民族を意味し、「土」は祖国を意味する。
- 4) 従来の研究では、この小説を反ナチス抵抗小説とする解釈を前提に専らその小説形式についての議論がなされてきた。ジェルジ・ルカーチの『歴史小説論』*Der historische Roman* (1965年) では、旧教同盟による支配をナチス支配の似姿として、アンリをナチスに対抗すべき人物の先例として捉えている。一方、エルンスト・ヒンリクス論文「比喩としての伝説」*Die Legende als Gleichnis* (1971年) は、意図的な史実の変更や省略によって、様々な利害関係の絡まり合いであった歴史的・社会的対立が反ナチス闘争という現代の比喩に「気化」されていることを指摘する。このように、歴史の中に先例を見出したのか（歴史小説）、歴史的題材を使って現代の比喩を描いたのか（現代小説）というような小説様式に関する解釈は様々だが³、いずれもこの小説を反ナチス抵抗小説とする解釈で従来の研究は一致している。
- 5) Heinrich Mann: *Ein Zeitalter wird besichtigt*. Studienausgabe in Einzelbänden. Hg. von Peter-Paul Schneider. Frankfurt am Main, Fischer Taschenbuch Verlag, 2007. 以下引用の際に ZA と略記する。
- 6) 渡辺一夫『フランス・ユマニスムの成立』、岩波全書セレクション、2005年、6-7頁。
- 7) Heinrich Mann: *Zola*. In: *Die Weißen Blätter*. Leipzig, Verlag der Weißen Bücher, Jg. 2, Bd. 2, S. 1312-1382, 1915. 以下、引用の際、WB と略記する。
また、訳出の際に以下の文献を参考にした。ハインリヒ・マン『歴史と文学』、小

栗浩訳、晶文社、1971年。

- 8) Thomas Mann, Heinrich Mann: *Briefwechsel 1900-1949*. Hg. von Hans Wysling. Frankfurt am Main, Fischer Taschenbuch Verlag, 2005, S. 172.
- 9) イブセンは『民衆の敵』*En folkefiende* (1882年)で主人公に「一人立つものが一番強い」と言わせて、それまでの民主主義への共感を捨て貴族主義に向かった。ニーチェの貴族主義は『道徳の系譜』*Zur Genealogie der Moral* (1887年)における貴族道徳に代表される。
- 10) Heinrich Mann: *Der Kopf*. Studienausgabe in Einzelbänden. Hg. von Peter-Paul Schneider. Frankfurt am Main, Fischer Taschenbuch Verlag, 2011. 以下引用の際にKと略記する。
- 11) Ernst Hinrichs: *Die Legende als Gleichnis. Zu Heinrich Manns Henri-Quatre-Romanen*. In: *Text + Kritik. Sonderband Heinrich Mann*. Hg. von Heinz Ludwig Arnold. München 1971, S. 123f.
- 12) 『エッセー』第二卷十七章。
- 13) 18世紀フランスの劇作家で、ポーマルシェの友人であったポール・フィリップ・ギュダン Paul-Philippe Gudin de La Brenellerie の詩。
- 14) ここでは共通点を指摘するにとどめるが、実証的な研究が必要である。
- 15) Friedrich Nietzsche: *Die fröhliche Wissenschaft*. In: *Werke in sechs Bänden Bd. 3*. München, C. Hanser Verlag, 1980, S. 34.
また、訳出の際に以下の邦訳を参照した。フリードリヒ・ニーチェ『悦ばしき知識』、信太正三訳、ちくま学芸文庫、2007年、56-57頁。
- 16) マンはその初期には権力に従順なドイツ人のメンタリティーの対極にあるものとして、ニーチェの超人をチェーザレ・ボルジアのような強烈な個人のイメージと重ね合わせて肯定的に受け止め、作品のモチーフとしたが、ニーチェの思想が権力肯定論として解釈されるようになると、彼はニーチェの思想から距離を取るようになった。大石紀一郎ほか『ニーチェ事典』、弘文堂、1995年、608頁。
- 17) Antoine Séréys: *Lettres inédites d'Henri IV, et de plusieurs personnages célèbres*. Paris, H. Tardieu, 1802, p.62.
- 18) Jules Michelet: *Histoire de France Tome XIII*. Paris, A. Lacroix, 1877, p.40.
- 19) 坂本さやか「ガブリエルの死 ミシュレ『フランス史』におけるアンリ四世の愛妾の表象」、『女性・ヒロイン・社会 社会と時代の表象における女性像』所収、岩手大学人文社会科学部、2011年、143頁。
- 20) Ernst Hinrichs: *Die Legende als Gleichnis. Zu Heinrich Manns Henri-Quatre-Romanen*. In: *Text + Kritik. Sonderband Heinrich Mann*. Hg. von Heinz Ludwig Arnold. München 1971, S. 123f.
- 21) Heinrich Mann: *Gestaltung und Lehre*. In: *Verteidigung der Kultur. Antifaschistische Streitschriften und Essays*. Hamburg, Claassen, 1960, S. 519.
- 22) 新約聖書コリント前書 第十三章。

Über den »streitbaren Humanisten« in Heinrich Manns *Henri-Quatre-Romanen*

Masaru NAGAMITSU

Die Arbeit befaßt sich mit der Hauptperson Henri in Heinrich Manns Romanen *Die Jugend des Königs Henri Quatre* (1935) und *Die Vollendung des Königs Henri Quatre* (1938) unter dem Aspekt der Figur des »streitbaren Humanisten« mit dem Ziel diese Werke neu zu interpretieren, da sie in der bisherigen Forschung häufig als ausschließlich anti-nationalsozialistische Romane betrachtet worden sind.

Die von Heinrich Mann in seinem französischen Exil verfaßten Henri-Quatre-Romane weisen durchaus viele Elemente auf, die sich als satirische Angriffe gegen den Nationalsozialismus lesen lassen. Daher ist häufig in der bisherigen Forschung der Konflikt zwischen Henri und seinen Feinden wie der katholischen Liga, Spanien und den Habsburgern, und damit die Opposition zwischen Hugenotten und Katholiken, als ein Gleichnis für den Widerstand gegen den Nationalsozialismus aufgefaßt worden.

Folgt man diesem Ansatz, gibt es allerdings Figuren, die aus diesem Schema herausfallen (z.B. der Herzog von Bouillon Turenne und der Marschall Biron. Ersterer ist ein Hugenotte, der zu Beginn ein Freund Henris ist, später aber zu seinem Feind wird, der Zweite ist ein Katholik, der vom Feind zum Freund wird). Außerdem begann Heinrich Mann die Konzeption der Romane bereits 1925, als der Nationalsozialismus noch keine große Gefahr darstellte. Aus diesen Gründen lautet die These des Artikels, das sie nicht nur als anti-nationalsozialistische Romane gelten können.

Der als »Prinz von Geblüt« bezeichnete Henri wird durch die Lehren Montaignes zum »großen König«. Fast alle Schilderungen der Lehren Montaignes sind Zitate aus seiner Schrift *Les Essais*. Lediglich das Ideal des »streitbaren Humanisten« beruht nicht auf Montaignes, sondern auf Heinrich Manns Konzeption. Mann bezeichnet die bloßen »Humanisten« als »erkrankte Vernunft« und unterscheidet sie damit von den »streitbaren Humanisten«. Dem ‚Nur-Humanisten‘ wird der »streitbare Humanist« als Ideal gegenübergestellt, der das Bekenntnis des Humanismus, »der ein Glaube ist an die irdische Bestimmung des Menschen, vernünftig und tapfer, frei, wohlhabend und glücklich zu sein« verkörpert.

Der »streitbare Humanist« kämpft für das glückliche Leben der Menschen. Daher ist der Kampf Henris nicht für eine bestimmte Religion oder eine bestimmte Partei, und die Feinde Henris sind auch nicht eindeutig bestimmte, wie die katholische Liga, Spanien oder Habsburg. Sie sind vielmehr »seine ewigen Gegenspieler«, »eine Gattung Mensch: die will die düstere Gewalt, die Erdschwere, und Ausschweifungen liebt sie im Grauen und in der unreinen Verzückung«. Was Heinrich Mann somit vor allem hier verhandelt, ist dieser Gegensatz im Menschen zwischen seiner vernichtenden und seiner erschaffenden Natur.

Der grundlegende Entwurf des »streitbaren Humanisten« findet sich in Heinrich Manns Essay *Zola* (1915). In diesem Essay beschreibt er das Leben des französischen Naturalisten und seinen literarischen Lehrmeister ins besondere im Hinblick auf seinen »Geist« und seine »Tat« während der Dreyfus-Affäre. Gleichzeitig kritisiert er die Intellektuellen, die »gedankliche Stützen« lieferten für die deutschen Angriffe im Ersten Weltkrieg, und hält ihnen mit seinem Vorbild sein Ideal des Intellektuellen entgegen. Der vorbildliche »Intellektuelle«, den Heinrich Mann in diesem Essay entwirft und als »handelnder Geist« bezeichnet, kämpft um das glückliche Leben des Menschen. Zwar ist der ideale »Intellektuelle« nicht identisch mit dem »streitbaren Humanisten«, da sie mit anderen Mitteln vorgehen, aber beide führen den Kampf um das glückliche Leben des Menschen gegen die unterdrückerische Macht. Deshalb kann man im »Intellektuellen« die Essenz des »streitbaren Humanisten« erkennen.

Das zeigt sich vor allem, wenn man die Figur des Intellektuellen in Heinrich Manns Roman *Der Kopf* (1925), der zwischen den Veröffentlichungen des Zola-Essays und der Henri-Quatre-Romane geschrieben wurde, mit in Bezug setzt. Die Hauptperson Terra agiert auch zum Wohle der Menschen und gegen ihre Unterdrückung, jedoch wird er vom »Industrieabsolutismus, Demokratie genannt« besiegt und geht zugrunde. Zwar besitzt er die richtige Einstellung, aber er wird als ein einsamer und schwacher Mensch wenig positiv porträtiert, der letztlich deshalb scheitert, weil ihm die Verbindung zum Volk fehlt und er darüber hinaus keine tiefen Bindungen zu anderen Menschen besonders zu Frauen eingehen kann. Der Untergang des »Intellektuellen« Terras weist autobiografische Züge auf, da Heinrich Mann selbst in der Weimarer Republik die Erfahrung des Scheiterns gemacht hat. Aber auch wenn der Vorläufer des »Intellektuellen« in *Der Kopf* scheitert, fährt Heinrich Mann fort die Figur des »handelnden Geist[es]« weiter literarisch auszugestalten. Es zeigt sich, dass der »Intellektuelle« in *Zola* durch das Scheitern in *Der Kopf* sich zu dem »streitbaren Humanisten« im Henri-Quatre-Romanen wandelt. Die Ausgestaltung des »handelnden Geist« ist letztlich das Lebenswerk Heinrich Manns.

Hinsichtlich der Verbindung mit dem Volk, an der es Terra mangelt, weicht die Romanfigur Henri wesentlich vom historischen und legendären »Le bon roi« ab, da anders als dieser fiktive König unter erheblichen Schwierigkeiten die Nähe zum Volk erringt. Heinrich Mann stellt Henri nicht als eine heldenhafte Gestalt dar, sondern als einen menschlichen Herrscher, der sich empathisch über den Erfolg freut und sich mit dem Misserfolg quält.

Vergleicht man nun Henri mit Terra unter dem Aspekt der Volksnähe, versteht man, dass Henri mit seiner Zielsetzung »Sonntags ein Huhn im Topf« zu haben sehr viel näher an den Bedürfnissen seiner Untertanen ist als Terra, der eine leere und volksfremde »Revolution von oben« betreiben will.

Mit Henri wird eine Herrscherfigur gezeichnet, der das glückliche Leben des Menschen am Herzen liegt und das Streben nach diesem mit dem Wohl des Volkes verbindet, dem Henri »dienen« möchte und »vorauseilen« will. Er kann es, weil er zugleich »Prinz von Geblüt und Volk« ist. Dieser Ausdruck steht im Kontrast zum König von Spanien Phillip II. Für das Volk ist dieser König des

Weltreichs, der überwältigende Macht hat, unantastbar. Im Gegenteil zu Phillip besitzt Henri die Nähe zum Volk. Deswegen kann sich Henri für das Wohl seines Volkes und damit stellvertretend der Menschen an sich einsetzen.

In Bezug auf die Liebe zu den Frauen fällt auf, dass die Geliebten Henris, wie Königin Margot und Gabrielle, als ambivalente Charaktere gezeichnet werden. Zudem verdeutlicht der reine textliche Umfang ihrer Darstellung die wichtige Funktion innerhalb der Handlung. Beide Frauen werden sowohl als »Göttinnen« inszeniert, wenn Margot als »Venus« und Gabrielle als »Helena« bezeichnet werden, die seinen Aufschwung zum großen König unterstützen, sowie sie auch als »femme fatale« dargestellt werden, die ihn schlussendlich in den Untergang führen.

Die selbe Leidenschaft aber, die Henri bei seiner Liebe zu den Frauen ein ums andere mal Fehler begehen lässt, bis ihm schließlich nach seinem Leben getrachtet wird, macht ihn andererseits zu dem großen König für sein Volk. Sie ist somit seine größte Schwäche und seine größte Stärke zugleich. Heinrich Mann unterstreicht dies noch durch die Kontrastierung von Henri zu seinem Erzfeind Philipp. Der König von Spanien, der überwältigende Macht besitzt, kommt zu Tode, als er nach langer Abstinenz das erste Mal wieder sich Befriedigung bei einer Prostituierten verschaffen will. Dieses Muster, dass der Mächtige um der Liebe willen entweder die Macht opfert oder die Liebe verliert, durchzieht auch frühere Werke Heinrich Manns.

Allerdings, wenn auch Henri bewusst ist, dass seine Leidenschaft Gefahr und Intrigen auslösen, will er die Frauen nicht aufgeben. Er nutzt stattdessen die aus den Beziehungen gewonnene Kraft um seine Berufung zu erfüllen.

Heinrich Mann lässt Henri am Ende dieser Romanen sprechen: »Die Welt kann nur durch die Liebe gerettet werden. In einem Zeitalter der Schwachheit hält man Gewalttätigkeit für Festigkeit. Einzig die Starken können es sich herausnehmen, euch zu lieben, wenn ihr es ihnen auch schwer genug macht.« Oder anders formuliert: wer nicht lieben kann, ist nicht der Starke, auch wenn er überwältigende Macht besitzt. Geschichtlich betrachtet sind Philipp II. und Henri IV. in Bezug auf ihre politische Macht ebenbürtig. Aber der Autor interessiert sich nicht für die strategischen Verdienste des Königs, sondern nur für seine Fähigkeit »zu lieben«.

Heinrich Mann erwähnt in seinem Essay, dass die Liebe Henris zum Volk und die zu den Frauen »dieselbe Wurzel« haben. »Zu lieben« ist der Kern des »streitbaren Humanisten«. Wenn man keine Liebe hat, verbindet sich der Geist nicht mit der Tat, und die Tat ist nutzlos ohne den Geist. »Zu lieben« schafft die dialektische Synthese aus Geist und Tat. »Wenn ich mit Menschen- und mit Engelzungen redete und hätte der Liebe nicht, so wäre ich ein tönendes Erz oder eine klingende Schelle«. Dieses Wort der Bibel ist das Leitmotiv der Henri-Quatre-Romane.

Man sollte diese Romane deshalb nicht nur als antinazistische Romane, sondern als Werke interpretieren, in denen Heinrich Mann sein literarisches und politisches Problembewußtsein über den Menschen intensiviert. Heinrich Manns Henri-Quatre-Romane sind die literarische Frucht dieses intellektuellen Prozesses.